

令和2年度

兵庫県立視覚特別支援学校

支援部

アイ・あい だより



7月号

ピアノの日

7月6日は「ピアノの日」とされています。日本研究のために来日した、ドイツ人医師シーボルトが日本に初めてピアノを持ち込んだことに由来します。

日本の全盲ピアニスト辻井伸行さんは、生まれながらの全盲です。視覚障害者用の楽譜は見ず、音ですべて覚えるそうです。

知的障害を併せ有する全盲の児童がピアノを前にして、スーパーで流れている曲のワンフレーズを、音を確かめながら弾くのを聴いて、びっくりしたことがあります。鍵盤や楽譜を目で確認しない分、音だけに集中し、音をしっかり聞き分け、繊細に音の強弱を操ることができるのかもしれない。



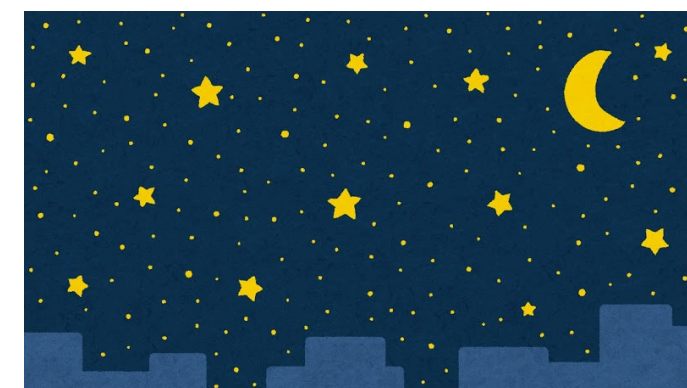
弱視教育研修会

- 日時 令和2年8月7日(金) 9:50~15:30
- 対象 小中学校等に在籍する弱視児童生徒にかかわる職員
弱視教育に関心のある教育関係者
本校教職員
- 講演 講師 神戸アイセンター病院 眼科医 仲泊 聡氏
「弱視教育と医療の連携
～子どもたちのQOLを向上させるために～」
- 体験活動 「弱視キットによる弱視体験」



今回は、周辺視野についてお話します。

周辺視野には、桿体細胞が多くあります。桿体細胞は、光の強弱を感じることを得意としています。夜空を眺めていて、目の端で弱い光の星を見つけたことがあるでしょうか。その弱い光の星を注目して見ようとする、見えなくなります。これは、周辺視野では桿体細胞で光を感じているのが、注目することによって色を感じる錐体細胞の分布が多い中心視野で見ることになってしまい、弱い光を感じにくくなるためです。天体観測では、わざと周辺視野で見る「そらし目」という方法を使うことがあります。



周辺視野は動いているものに対する反応、全体のあらましを捉えることも得意としています。例えば、サッカーで、ボールをもった相手チームの選手だけを見ていては、そのほかの選手から不意を突かれてしまいます。プレイしていると、意識していなくても、ボールを持つ選手だけではなくパスを待っている相手チームの他の選手や、味方の配置・守備体制・選手の位置・距離などが見えていると思います。周辺視野は広範囲を捉えることができ、周囲と自分との位置関係を把握しています。

周辺視野を遮断してしまうと、平衡感覚が失われる、精神的に不安を感じてしまう、という実験結果もあります。また、槍投げの選手に対して周辺視野を使えないようにして実験をしたところ、投げた槍が左右に偏ってしまった、普段より距離が伸びなかった、ということもあったそうです。

私たちは、自分で意識して見ているもの以外にも、周辺視野を使って広い範囲を認識しているのです。

